

清代琉璃廠書肆に関する一考察：朝鮮使節の記録を中心に

| | |
|----------|---|
| その他のタイトル | Bookstores at the Rurisho (琉璃廠) District in Peking (北京) in Qing (清) Dynasty |
| 著者 | 一ノ瀬 雄一 |
| 雑誌名 | 史泉 |
| 巻 | 67 |
| ページ | 25-39 |
| 発行年 | 1988-03-31 |
| URL | http://hdl.handle.net/10112/00025718 |

清代琉璃廠書肆に関する一考察

——朝鮮使節の記録を中心にして——

一ノ瀬 雄 一

- 一、はじめに
- 二、北京における書肆の沿革
- 三、清代琉璃廠の書肆
 - (一) 書肆の内外部構造
 - (二) 書籍商経営の一側面
 - (三) 書肆の販売品目
 - (四) 書肆における人的交流
- 四、むすび

一、はじめに

康熙・雍正・乾隆という時代は、中国文化史上で一つの画期をなしている。顧炎武・黄宗羲という大家をはじめとし、經学では戴震、史学では王鳴盛・錢大昕・趙翼・章学誠、地理学では顧祖禹、詩文では朱彝尊・王士禎・袁枚・姚鼐という諸家が活躍し、小説では『聊齋志異』の蒲松齡・『儒林外史』の吳敬梓・『紅樓夢』の曹雪芹がいずれもこの時代に出現している。

一方、清朝の文化事業も盛んで、『康熙字典』・『淵鑑類函』・『佩文韻府』・『駢字類編』・『古今圖書集成』・『四庫全書』などの諸書が皇帝の命で次々と編纂された。

知識人や清朝の文化事業に従事した編纂官がどのように著述の材料を収集したのか、あるいは彼らの著作が後世にどのような影響を与えたのかについては、先学の研究に詳しく述べられている。

しかし書物を抜きにして著述や編纂活動やその影響を語ることはできない。それらの書物を専門に扱うのは書籍商であり、売買が行なわれる主な場所は書肆である。したがって書肆の活動やそこで行なわれる交遊関係は、文化史を観る上で一つの指標にもなり得る。

北京の書肆に限ってみれば、葉德輝^⑥・孫殿起^⑦・王治秋^⑧・藤塚^⑨等の先学の業績が上げられる。しかし前二者の業績はいずれも史料集という性格を持ち、王氏の論考も書肆のディテールや書籍商の活動について説明されているとは言えない。また藤塚氏の研究は中国と朝鮮国との文化交流を扱ったものであり、「書肆の文化史」という視点とは自ら異なったものである。

そこで本稿は朝鮮使節の紀行文、いわゆる「燕行録」^⑩に基づき、対象を北京の琉璃廠にしぼり、書肆の構造、経営方法、販売品目などについて考察を加えたい。

二、北京における書肆の沿革

中国の首都北京は、唐代までは薊州と呼ばれ、遼代には南京(燕京)、金代には中都と呼称された。十三世紀にはモンゴル族が南下して中都一帯を奪い、新たに都城を建設した。この地がすなわち元の大都(燕京)であり、現在の北京の原形はこの時に確立されたといえる。元の大都は「周圍六十里一門」の規模を持ち、北の草原地帯と南の農耕地帯とを同時

に統治するのに絶好の地とされた。この政治都市は同時に北方最大の商業の中心地でもあり、城内には商業地域が数カ所形成された^⑪。

都城の中心に位置する鐘樓・鼓樓の周辺には緞子市・皮帽市・帽子市・鵝鴨市・珠子市・沙刺市(寶石市)・鉄器市・米市・麵市等があり、都城西南部の羊角市には羊市・馬市・牛市・駱駝市・驢騾市等があった。

そしてこの他に、都城南部の中書省前には書籍市や文具市と呼ばれる地区が形成されていた。当時、大都を訪れた高麗人が、この書籍市で『三国志評話』・『趙太祖飛龍記』・『唐三藏西遊記』などの本を買い求めたという^⑫。したがって現在確認できる北京最古の書肆は元代に形成されたと言える。

明の永楽帝の時代に北京への遷都が行なわれ、北京では政府の出版事業が国子監や司礼監を中心にされ、主として経書や史書が印刷された^⑬。他方、民間でも多くの書籍が印刷され販売された。明代北京の書坊は、南京書坊の三十一家、あるいは福建省建陽書坊の四十七家^⑭と数は少ないが、明確に名前が知れるものは七家を数える^⑮。また書肆が集中しているのは、「大明門の右、礼部門の外、拱宸門の西」の区域であった。さらに人が多く集まる季節・場所には、必ず書籍市が並んだ。会試が行なわれる年の三月には内城東部の挙場前に、また花朝(旧曆二月十五日)後の三日には東部の燈市に、そして毎月一・十五・二十五日には西部の城隍廟市にそ

れぞれ書籍市が開かれた。^⑤

清代の初めには、書籍市は外城西北部の慈仁寺（報國寺）で開かれていた。清代初期の詩人王士禛は、俸給の全てを書籍につきこむほどの本好きで、しばしばこの書籍市を利用した。また王は、買いたかつた本を他人に買われ、悔しさのあまり十日間も寝込んだという。^⑥

この慈仁寺の書籍市も十八世紀には著しく衰退し、人跡稀な状態になっていた。^⑦この書籍市にかわって、新たに注目されるのが琉璃廠の書肆である。

琉璃廠に書肆が置かれたのは清初とされるが、乾隆時代には既に殷賑の巷となっていた。そして同時代の後半には多くの書肆が櫛比し、本屋街と言うべき一角が形成されていたのである。

三、清代琉璃廠の書肆

(一) 書肆の内外部構造

乾隆三十四年（一七六九）当時の琉璃廠書肆の賑わいは、李文藻の「琉璃廠書肆記」^⑧に知られる。同書には書肆の名、経営者の姓、琉璃廠内における書肆の位置関係などが詳しく記されている。書肆の位置関係は図1のようになる。

李文藻の記録とはほぼ同時期、乾隆三十八年（一七七三）に四庫全書編修官であった翁方綱は、著名な書肆として五柳居・文粹堂の二店を挙げている。^⑨また、その七年後の同四十五年

（一七八〇）八月、琉璃廠を訪れた朝鮮使節朴趾源は、書肆中の最大の店は文粹堂・五柳居・先月楼・鳴盛堂の四店と述べている。^⑩以上により、当時有名だった書肆の名が具体的に知られる。

それではこれら琉璃廠書肆の内外部構造はどのようになっていたのだろうか。この点についても、朝鮮使節の記録が当時の状況を詳しく記している。朴趾源の『熱河日記』関内程史の条には、

（八月）初三日己酉晴。…出（宣武）門、右转入琉璃廠。初街有五柳居三字題。此屠鉦冊肆也。前歲、懋官輩多賀此肆、津々説五柳居。今過此中、如逢故人。懋官臨別又言、「若尋唐駕港（樂宇）、先至先月楼、其南転小衙衙、第二門即唐宅。」云。…回車入北。条路傍、金字先月楼、忽映車前、此亦冊肆也。

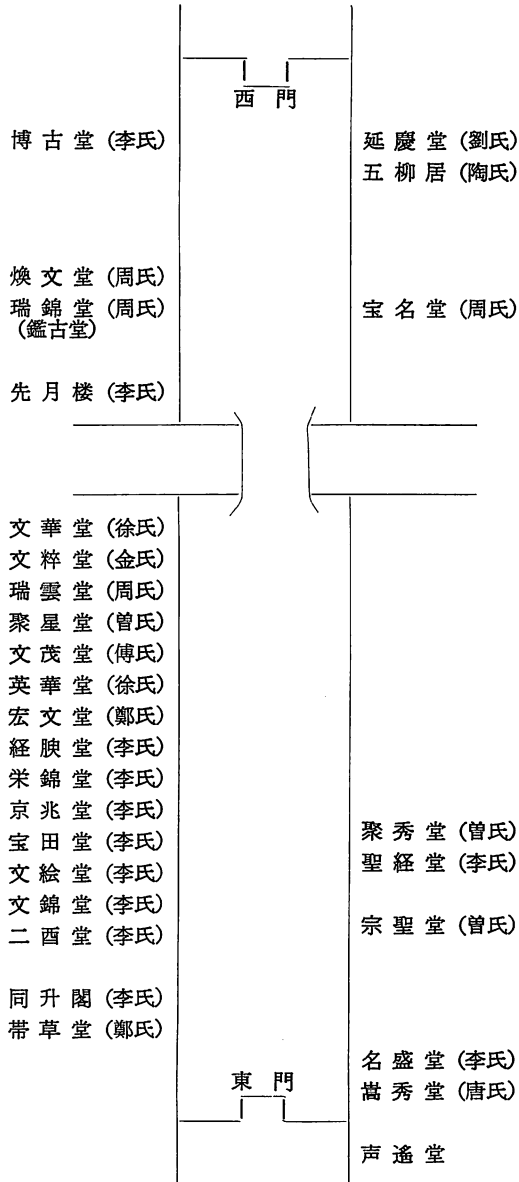
とあって、書肆は店名を看板に書き、店頭に掲げ、その看板が人目をひくように金字で書かれていたことが知られる。

乾隆五十六年（一七九一）に琉璃廠を尋ねた金正中の『燕行録』^⑪には、

而書肆之旗、令人心醉目眩、弥籤宝軸、插架而連屋、青緗錦帙、疊几而准床。入而視之、未知何書之在何方、似難挽得卷。面糊小片白紙、各書某書某帙也。

とあり、書肆には旗が掲げられていたこと、書肆の本棚には、多くの書物が間断無く収納されていたことなどが知られる。

図1 乾隆34年当時の琉璃廠書肆見取図



藤塚郷『清朝文化東伝の研究』21頁による。

また柳得恭の『燕台再遊録』には、

聚瀛堂特瀟灑、書籍又富、広庭起簾棚、隨景開闢、置椅三四張、牀卓筆硯、楚楚略備、月季花數盆爛開、初夏天氣甚熱、余日雇車至聚瀛堂散悶、卸笠拋椅而坐、隨意抽書看之、甚樂也。

とあつて、広い庭で竹製の棚を立て、椅子・机・筆硯を備え、バラの花が香る中、客が本を繙くという状況が見られた。

書肆の内部構造については、道光八年（一八二八）に北京に來た朴思浩の次の記録が詳しい。

冊肆在正陽門外、非止一處。其畜書之法、設堂數三十間、每間四壁設間架層々并々、排列積峙、每套付籤曰某冊。故充棟溢宇、不可計量。而前閣置一大卓、卓上置十余卷冊匣。乃冊名目錄也。人坐椅上、欲買某冊、則一挙手抽給、抽挿甚便易也。〔心田稿〕留館雜錄、冊肆記

すなわち、部屋の四面にすぎ間なく本棚が作られ、本が収納されている。前閣には机を置き、机上には書目を入れた箱が置かれている。客は椅子に腰掛けてその書目を調べ、欲しい本があれば自ら抜きとるという方法がとられていた。

さらにもう一つの例を見てみよう。道光十二年（一八三二）に北京を訪れた金景善の『燕巖直指』卷三、留館録上、琉璃廠記には、

出宣武門、東南至正陽門外。將向岳王廟、路經其中、夾路為市鋪。東南（東西）各有里門。西題琉璃廠西辺、東題琉

璃廠東辺。自西門至東門、可七八里。每鋪豎紅竿金書、鋪名如緯文堂、泰興局、鳴盛堂。諸号是也。：就冊肆覓茶。蓋比他肆稍雅。暫坐。亦無可嫌故也。試周覽教舖。蓋一舖之儲已不知為幾万卷。屋凡兩重、或三四重。而每屋三壁、周設懸架、架凡十數層、每層皮書、卷秩齊整。每套皆有標紙、俯仰視之不可領略。覓其都録、見之、則亦多不聞不見之書。看到未半、眼已眩昏。

と書肆の様子を述べている。書肆では客にお茶が提供され、他の商店に比べ落ち着いた雰囲気であること、建物の構造が二層以上であること、商品である書籍の量や種類が豊富であったこと等が知られる。

(二) 書籍商經營の一側面

次にこれら書肆の經營者が、どのような性格の人物であったのかについて述べたい。李文藻の「琉璃廠書肆記」には、北口路西有文粹堂金氏、肆賈謝姓、蘇州人、頗深於書、：又西為五柳居陶氏、在路北、近來始開、而旧書甚多、与文粹堂皆每年購書於蘇州、載船而來。五柳多璜川吳氏藏書。：又西為延慶堂劉氏、在路北、其肆賈即老章、前開鑑古堂者也。近來不能購書於江南矣。夏間從内城買書數十部。：書肆中之賤事者、惟五柳之陶・文粹之謝・及章也。韋湖州人、陶・謝皆蘇州人、其余不著何許人者、皆江西金溪人也。

とある。当時著名な文粹堂謝氏や五柳居陶氏や鑑古堂韋氏という書籍商たちがいづれも江南の出身で、書籍取引上、江南と密接な関係を持っていたことが知られる。また柳得恭の『燕台再遊録』にも、

崔琦、琉璃廠之聚瀛堂主人。陶生、五柳居主人也。崔是錢塘人、陶生亦南邇人也。

とあって、琉璃廠の書籍商と江南方面との強い関係がここにも知られる。

これらの書肆が江南から北京までどのようにして書籍を輸送したかと言えば、これは五柳居陶氏が自ら語っている。乾隆四十三年（一七七八）到北京を訪れた李德懋の『入燕記』下に、

陶氏所藏、尤為大家、揭額曰五柳居。自言、書船從江南來、泊于通州張家灣、再明日當輪來、凡四千余卷云。

とあるように、書籍の運搬が水運によっていたこと、書籍運搬用の船には四千余巻の本が積まれていたことが知られる。

この五柳居主人陶氏については、いささか詳しい記録が残っている。孫星衍の『五松園文稿』に収録された「清故封修職郎兩浙塩課大使陶君正祥墓碣銘」がそれである。まず冒頭に、

封修職郎兩浙塩大使陶君、名正祥、字庭学、号瑞菴。祖父某、自浙之烏程縣移家吳門。

とあって、彼の名・字・号及び出身地が知られる。次に、

家貧無以為養、遂以價書為業。与吳中名下士交接、聞見日広、久之於書能知、何書為宋元佳本、有誰氏刊本、版貯何所、誰氏本善且備、誰氏本刪除本文若注、或舛誤不可從。とあり、家が貧しく経済的に苦しかったために書籍販売を職業とし、扱う商品も新刊書籍ではなく古書籍が主であったことがわかる。そして蘇州の在野知識人と交際する中で、古籍に関する知識を身につけ、

都中鉅公・宿学、欲購異書者、皆詣君、車徹滿戸外。

と言われるほどに評判になった。そんな五柳居主人がある日、孫星衍に次のように語った。

語予云、恨不為一書、記所過目宋元明刊刻經伝諸子各本卷帙文字異同優劣、補書目、家未備、惜今晚矣。

すなわち、陶氏自ら書目を補うための工具書を著そうとしたが、それが出来ず残念だと言っているのである。なぜ「一書を為さざる」ような状況になったかは明らかでないし、以後もその念願が果たせたかどうかとも明らかでない。しかし陶氏が単なる商売人に止まらず、立派な知識人であったことは十分にうかがえよう。

この五柳居主人陶氏は、極めて真摯な経営理念を持っていた。彼の墓碣銘には続いて、

与人貿易書、不沾沾計利。所得書、若值百金者、自以十金得之、止售十余金。自得之若十金者、售亦取余。其存之久者、則多取余、曰「吾求贏余、以餬口耳。己好利、亦使購

書者獲其利。人之欲利、誰不如我。我專利而物滯不行、猶為失利也。」以是售書甚獲利。

とあり、書籍販売に際して、軽々しく目先の利益だけを考へることなく、できるだけ安い価格で買ひ手に提供するという態度が一貫していた。陶氏自ら言っているように、「何とか生活できるだけの利益があればよい。利益第一主義であれば商品が滞つて売れず、結局は利益を失うことになる。」という明確な経営理念を持って、書籍を扱っていたのである。このような人物であつたため、

朝之公卿、四方好學之士、無不知有五柳居主人者。というように、その令名は広く知れわたつていた。

以上のように、古籍鑑定に秀で、一貫した経営理念を持つて知識人たちと交際した五柳居主人陶氏であつたが、

嘉慶二年八月二日、卒於都門、春秋六十有六。とあるように、嘉慶二年（一七九七）八月二日、北京の地で亡くなつた。享年六十六歳であつた。

五柳居陶氏以外に、鑑古堂韋氏（老韋）及び聚瀛堂崔氏についても、その横顔を述べたい。鑑古堂韋氏については、「琉璃廠書肆記」に記録がある。すなわち、

韋年七十余矣、面瘦如柴。竟日奔走朝紳之門。朝紳好書者、韋一見、諗其好何等書、或經濟、或辭章、或掌故、能各投所好、得重值。而少減輒不肯售、人亦多恨之。

とあり、韋氏は人がどのような本を求めているかを鋭く見抜

く力を持つていた。しかし高い値段で本を売りつけ、少しも値引きしようとしなかつたために人の恨みをつたことが知られる。この点、常に安い価格で売ろうと努めた五柳居陶氏とは対照的である。

しかし「琉璃廠書肆記」の次の記事にある如く、韋氏の書物に関する知識は、他の書肆に勝るものがあつた。

吾友周書昌、遇不全者、亦好買之。書昌嘗見吳才老韻補、為他人買去、怏怏不快。老韋云、「邵子湘韻略、已尽採之。」書昌取視之、果然。老韋又嘗、勸書昌誦魏鶴山古今考、以為宋人深於經學、無過鶴山、惜其罕行於世、世多不知採用。書昌亦心折其言。

このように、一般の知識人と対等に、或いはそれ以上に書物に通じていたことがわかる。

また聚瀛堂崔氏についても、若干の記録が見られる。聚瀛堂については前節で触れたが、次の記事は崔氏がどのような理由で北京に書肆を経営するようになったのかを教えてください。崔生年少、亦能詩、雅人也。

余（柳得恭）問曰、君何故離鄉、在此販書乎。

答、父命。

余曰、命甚事。

答、為功名、如今五六年矣。但此時非功名之時、欲捲帙、而書本若是浩大、一時亦難區處、所以躊躇也。（燕台再遊

録）

とあるように、功名を上げるため北京へ来て書肆の経営を始めたとあるが、この点、中国人の出世観がうかがわれ、興味深い。

(三) 書肆の販売品目

これら琉璃廠の書肆では、どのような書籍が販売されていたのだろうか。この点についても、朝鮮使節の記録が参考になる。

琉璃廠の書肆を尋ねた李徳懋は、朝鮮にほとんど或いは全く見られない書名を、次のように書肆ごとに記している。

嵩秀堂

- | | |
|------|-------|
| 通鑑本末 | 文献統纂 |
| 協紀弁方 | 精華録 |
| 賦彙 | 欽定三神 |
| 中原文憲 | 講学録 |
| 皇華紀聞 | 自得園文鈔 |
| 史貫 | 傅平叔集 |
| 陸樹声集 | 太岳集 |
| 陶石質集 | 升菴外集 |
| 徐節孝集 | 困勉録 |
| 池北偶談 | 博古図 |
| 重訂別裁 | 古文奇賞 |
| 西堂合集 | 帶經堂集 |

居易録

鉄網珊瑚

伝道録

温公集

經義考

笠翁一家言

子史英華

文粹堂

程篁墩集

忠宣公集

図絵宝鑑

儀礼節略

独制詩

名媛詩鈔

義門読書記

山左詩鈔

聖經堂

弇州別集

路史

施愚山集

書影

昭代典則

顧端公雜記

知新録

玉茗堂集

高士奇集

唐宋文醇

古事苑

繪園

史料苑

樂城後集

方輿紀要

冊府元龜

文体明弁

鈴山堂集

王氏農書

墨池編

感旧集

潜確類書

紀纂淵海

青箱堂集

格致録

沈碭士集

通考紀要

由拳集

聚星堂

本草經疏

間暑日鈔

安雅堂集

韓魏公集

倪元璐集

史懷

吳草廬集

宛雅

本草匯

曹月川集

詩持全集

榕村語錄

名盛堂

寄園寄所寄

苑石湖集

帶草堂

堯峰文鈔

名臣奏議

月令輯要

精華訓纂

精華箋註

遵生八牋

漁洋三十六種

觀象玩占

漁隱叢話

知不足齋叢書

隸弁

明文授讀

篆書正

益知錄

幸魯盛典

七修類稿

香樹齋全集

內閣上諭

帝鑑圖說

郁文堂

李二曲集

臣鑑錄

左伝經世鈔

穎古堂集

許魯齋集

理學備考

文茂堂

邵子湘集

文盛堂

黃氏日鈔

埤雅

班馬異同

王梅溪集

八旗通志

苑文正公集

許魯齋集

食物本草

皇清百家詩

闕里文獻考

班馬異同

盛明百家詩

貞道園集

英華堂

班馬異同

兵法全書

荆川武編

帝京景物略

群書集事淵海

漁洋詩話

本草類方

三魚堂集

廣群芳譜

呂氏家塾讀詩記

林子三教

文煥齋

楊龜山集

經腴堂

大說鈴

榕村集

名媛詩歸

音學五書

今詩篋衍集

瓠臚

穆堂集

今詩篋衍集

大說鈴

瓠臚

穆堂集

これらの書籍のうち、清代の禁書目録に収録されているものが幾つかある。すなわち笠翁一家言・篋行集・宛雅・舳賸は『禁書総目』に、感旧集・説鈴は『違碍書目』に、潜確類書・詩持は両目に、史貫は『全燬書目』に、頼古堂集・由拳集は『抽燬書目』にそれぞれ見られる。また精華録・太岳集・古文奇賞・書影・昭代典則・寄園寄所寄は、『清代禁書知見録』中にその書名が見える。

『違碍書目』が乾隆四十三年(一七七八)、『全燬書目』、『抽燬書目』(両者を併せて『銷燬抽燬書目』という)が同四十七年(一七八二)、『禁書総目』が同五十三年(一七八八)の成立である。そして李徳懋が残した記録は同四十三年(一七七八)当時のものであるから、禁書政策が本格化する以前の状況を、よく表わしていると言えよう。

当時刊行された書籍の目録は、朴趾源の『熱河日記』に、さらに詳しく見られる。朴が北京の琉璃廠を訪れたのは乾隆四十五年(一七八〇)八月のことであるが、彼が北京への途上に遼東の通遠堡で富図三格という満洲人と会っている。富図三格が語ったところによれば、親戚の折公が北京で鳴盛堂という書肆を経営しており、その書籍目録を携帯しているとのことであつた。朴は富図三格の人物は下品凡庸であると感じたが、新知見を得るためにと思い直し、彼の書目を書き写すことにした。彼が書き留めた書名は次に示す通りである。

○尺牘新語共六冊、汪淇(滄齋)箋

○焚書共六冊・蔵書共十八冊・統蔵書共九冊、李贄(卓吾)著

○官闈小名録・長洲雜記・西堂雜俎、尤侗(展成)著

○筠廊偶筆、宋犖(牧仲)著

○同書・字触・閩小記・因樹屋書影、周亮工(元亮)著

○四礼撮要、甘涼著

○説林・西河詩話、毛奇齡著

○韻白・匡林・韻学通指・溪書、毛先舒(雅黃)著

○西山紀游、周金然著

○日知録・北平古今記、顧炎武著

○不知姓名録、李清(映碧)著

○蔣説、蔣虎臣著

○影梅庵憶語、冒襄(辟疆)著

○古今書字弁訛・東山談苑・秋雪叢談、余懷(淡心)著

○冬夜箋記、王崇聞著

○皇華記聞・池北偶談・香祖筆記、王士禎(貽上)著

○毛角陽秋・群書類屑・閩閩語林・朱鳥逸史、王士禎著

○笠翁通譜・無声戲小説・鬼輪錢故事、李漁(笠翁)著

○天外談、石隴著

○奏對機緣、弘覺著

○十九種、柴虎臣著

○橘譜、諸虎男著

○日下旧聞共二十冊、朱彝尊(錫鬯)著

- 虞初新志、張潮（山來）著
 - 寄園寄所寄共八冊、趙吉士著
 - 説鈴、汪洸著
 - 説鈴、吳震芳（青壇）著
 - 檀几叢書、王暉著
 - 三魚堂日記、陸隴其著
 - 亦禪錄・幽夢影、張潮著
 - 粉墨春秋、朱尊彝著
 - 函京求旧録、朱茂曙著
 - 燕舟客話、周在浚著
 - 崇禎遺録、王世德著
 - 入海記、查嗣璉著
 - 琉球雜録、汪楫著
 - 博物典彙、黃道周著
 - 觀海記行、施閏章著
 - 柝津日記、周箕著
- 以上のうち、崇禎遺録は『全燬書目』に、蔵書と西堂雜俎は『禁書総目』に、統蔵書と博物典彙は『違碍書目』に、虞初新志と寄園寄所寄と説鈴とは『清代禁燬書目』補遺二にその書名が見える。また尺牘新語と天外談とは『禁書総目』と『違碍書目』に、日知録は『禁書総目』と補遺二に収録されている。そして重複するが、蔵書、統蔵書、書影、虞初新志、寄園寄所寄、説鈴、博物典彙の七書は、『清代禁書知見録』

に見える。これらの禁書を鳴盛堂が販売していたという事実から、禁書が当時まだそれほど徹底していなかったことが考えられる。

四 書肆における人的交流

これらの書肆に来る客は、当然のことながら知識人たちであった。科挙及第を目指す人たち、既に科挙に合格し政府の一員となった人たちなどはもちろん書肆の常連であったろうが、琉璃廠を訪れた朝鮮使節もその範疇に入るであろう。このため書肆はただ書籍を販売するだけでなく、集まった知識人たちが談話をする場をも提供していた。そのことを示す一例が次の記事である。

正月二十六日、往琉璃廠、尋味絳齋書坊、路南果有牌号。問于舖主、而生果有約、少間当来。乃与同行数人、坐張絳家、以待之。聞而生来、即往。周生、与彭少年迎于路上、屈身肅揖、辞謝入門。蔣生迎于門内、揖讓就坐。舖主進茶、設紙筆于桌上。蔣名本、年五十三、亦河南人。周名応文、年二十三、江西人。彭名光廬、年十七。：舖主姓周、応文之族叔也。付書畢見舖内、新刊書籍溢于架上。（洪大容『湛軒燕記』卷一）

この記録は乾隆三十一年（一七六六）のものである。蔣本・周応文・彭光廬という人物については不明である。しかし朝鮮の知識人と清朝の知識人とが、北京の一書肆とともに語り

合ったという状況は見てとれる。

朴趾源は、乾隆四十五年（一七八〇）八月に琉璃廠の六一楼で、数人の知識人と語り合っている。そのことは『熱河日記』関内程史、八月初三日の条に、

馭車、至楊梅書街。偶上六一楼、逢俞黃圃（世琦）少話。

徐文圃（璜）・陳立齋（庭訓）在座、皆佳士。約選一会此。

とある。このうち俞世琦は、同書葢葉記、夕照寺の条にその経歴が記されている。

訪俞世琦于夕照寺。寺不甚宏傑、而精灑幽復、真乃一塵不動、禪林中淨界、此為初見也。無一僧居住、皆閩越中落第秀才、無資不能歸、多留此中、相与著書刻板、以資生。時居共三十一人、為人質書、朝出未還、寂無一人。而所居皆潔淨、位置整齊、使人裴徊想詠不能去。析津日記云、燕京八景有金台夕照、此寺之所由名也。俞君本閩人、為陝西兵備道陳庭学姉婿。今年二月、喪妻、無子男、有四歲乳女、置婦家、身独与小僮棲此寺中。

俞世琦は福建の出身で、妻に先立たれ、四歳の幼女を郷里に残したまま北京に来て夕照寺に奇寓していた。この寺には俞だけでなく、福建や浙江の知識人三十一人等が同宿していた。彼等はいずれも会試に失敗し、金が無く帰郷できず、この寺に宿泊しながら共同で著述したり、筆耕や印刷を生業としていたのである。これらの落第生員たちは俞世琦と同様に、書肆を訪れて本を買い求めるとともに、同じ境涯の人々や店

主とも語り合ったことであろう。

さらに時代は下り、咸豊五年（一八五五）に北京を訪れた徐慶淳の『夢経堂日史』編三、日下贖墨の条にも、書肆における中朝知識人の交流の様子が次のように記されている。

（十二月）初五日癸巳、晴。晚往琉璃廠文華堂冊舖。坐閱群書目錄。問舖主曰、金口訣・青鳥經・石室錄・江註近思錄、在此否。時有一人年少、体胖容貌豐皙、手卷坐椅。問余曰、能通天文・地理・医藥・性理之学乎。

余曰、能。君亦能之乎。

曰、能。

余曰、可与論証乎。

曰、市肆之中、來人去人、自多擾擾弊。寓懷寧館、距此不多路。再以另日会面。賤姓方、名朔、号小東、家在徽州懷寧县。赴举、秋闈因幹、留京。

余曰、鄙姓徐、名慶淳、号海觀。為遊覽中国、隨棧入燕。偶爾見君於市肆。君其隱於市者耶。

從者從他來、喘息、而告曰、門將下鑰。乃起揖相別、忙入城門。

徐は琉璃廠の書肆文華堂へ行き、書目を見ながら本を注文しようとしたところ、そこで方朔という人物と知り合いになった。方朔が言うには、徽州懷寧县の出身で、会試受験のため北京に滞在しているとのこと。彼等は自己紹介の後、話し始めたが、すでに夜遅く城門が閉じようとしていたので、その

日は会釈して別れた。

翌日、方朔が手紙をよこし、再び会って談論したい旨を伝え、記念として自らの著作三冊を徐慶淳に贈った^④。以後も彼らの交際は続いている。以上の記事からも、書肆を舞台として朝鮮使節と中国の知識人とが知り合い、その交流を深めていたことが知られる。

上述のように、書肆は単に商品売買をおこなうだけの場ではなく、知識人たちが情報交換をし、中朝両国人が国際交流をする場でもあった。

四、むすび

以上のように、主に朝鮮使節の「燕行録」に基き、清代の琉璃廠書肆について具体的に述べた。それをまとめると次の四点に集約できるのであろう。

(一)書肆は二層あるいは三・四層の建築で、客の注意をひくために、看板や旗を掲げていた。店内に一步入れば、質量ともに豊富な書籍が棚にぎっしりとつまっており、客は卓子や椅子が置かれた所で書目を調べ、欲しい書籍を閲覧することができた。他の商品を扱う店舗に比べれば、書肆は落ちついた雰囲気を持ち、客にはお茶が提供された。

(二)書肆の経営者のうち、当時著名だった店主は江南と深い関係を持ち、江南から北京まで水運を利用して書籍を運んだ。書籍商の具体例としては、一貫した経営理念を持っていた五

柳居陶氏、書物に関して卓越した知識を持っていた鑑古堂章氏などの个性的人物をあげることができる。

(三)書肆が販売していた書籍の品目を見ると、禁書目録に収録されているものが少なからずあり、禁書政策がそれほど徹底していなかった当時の状況が知られる。

(四)書肆はただ書籍を販売するだけでなく、そこに知識人が集まって談話をし、さらには中朝両国人が交際をする場でもあった。

本稿で用いた「燕行録」は、中国側の資料に見られない貴重な記録を多く含んでおり、清代北京における文化活動の一端を明らかにし得たと思う。

本稿では、主に十九世紀半ばまでの琉璃廠書肆を考察の対象と限定したが、これ以後の状況については稿を新たに考究したい。

註

① 例えば次のような著作が上げられる。梁啓超『清代學術概論』(小野和子訳注、平凡社、東洋文庫二四五、一九七四年)。
増井経夫『中国の歴史書—中国史学史—』(刀水書房、一九八四年)。

青木正児『清代文学評論史』(岩波書店、一九五〇年)。

増田涉訳『聊齋志異』(平凡社、中国古典文学大系、一九七〇年)。

稲田孝訳『儒林外史』(平凡社、中国古典文学大系、一九六八年)。

- 伊藤漱平訳『紅樓夢』(平凡社、中国古典文学大系、一九六九年)。
郭伯恭『四庫全書纂修考』(台湾商務印書館、一九六七年)。
② 葉德輝『書林清話』(古籍出版社、一九五七年) 卷九「都門書肆之今昔」。
- ③ 孫殿起輯『琉璃廠小志』(北京古籍出版社、一九八二年)。
④ 王治秋『琉璃廠史話』(生活・読書・新知三聯書店香港分店、一九七九年)。
⑤ 藤塚郷『清朝文化東伝の研究』(国書刊行会、一九七五年)。
⑥ 朝鮮王朝は毎年、中国の北京に使節を派遣した。その使節が道中及び北京での見聞を記した旅行記を「燕行録」と総称している。「燕行録」を集成したのもとして、次の二例が上げられる。
① 成均館大学校大東文化研究院編『燕行録選集』上・下(京城、一九六〇～六二年)。
② 인촌문화추진회編『燕行録選集』一～十一(ソウル、一九七六～七七年)。
- ⑦ 陳高華『元大都』(北京出版社、一九八二年) 佐竹靖彦訳『元の大都』中央公論社、一九八四年) 一〇〇ページ。
⑧ 前註⑦一〇〇～一〇一ページ。
⑨ 前註⑦一二七ページ。
⑩ 張秀民「明代北京の刻書」『文献』第一期、一九七九年)。
⑪ 張秀民「明代南京の印書」(『文物』一九八〇年第一期)。
⑫ 張秀民「明代印書最多的建寧書坊」(『文物』一九七九年第六期)。
⑬ 前註⑩。
⑭ 胡応麟『少室山房筆叢』甲部『經籍會通』卷四「凡燕中書肆、多在大明門之右、及礼部門之外、及拱宸門之西。」
- ⑮ 前註⑭「每会試孝子、則書肆列於場前、每花朝後三日、則移於燈市、每朔望并下澣五日、則徙於城隍廟中。」
⑯ 王士禎『居易錄』卷十四「康熙乙巳(四年、一六六五)、自揚州州惟圖書數十篋而已。官都下二十余載、俸錢之入、尽以買書。嘗冬日過慈仁寺市、見孔安國尚書大伝・朱子三孔経伝通解・荀悦袁宏漢紀、欲購之。異日侵晨往索、已為他人所有、帰來悵悵不可釈、病臥旬日始起。」(前註⑤第五章、附「訪書雜記」所収)。
⑰ 戴璐『藤陰雜記』卷七、西城上「慈仁廟市久廢。前歲復興、未幾仍止。蓋百貨全資城中大戸、寺趾城遠、鮮有至者。国初諸大第宅皆在城西、往遊甚便、自地震後、六十年來荒涼已極。」
⑱ 李文藻『南澗文集』及び前註③第三章「書肆變遷記」所収。
⑲ 翁方綱『復初齋詩集』注「乾隆癸巳(三十八年、一七七三)開四庫館、即於翰林院藏書之所、分三処。凡内府秘書、發出到院為一処、院中旧藏永樂大典、内有摘鈔成卷、匯編成部者為一処、各省採進民間藏書為一処。毎日清晨、諸臣入院、設大廚、供茶飯。午後帰寓、各以所校閱某書庖考某典、詳列書目、至琉璃廠書肆訪之。是時、浙江書賈、奔轅輦下、書坊以五柳居・文粹堂為最。」(前註③第一章「概述」所収)。
⑳ 朴趾源『燕巖集』(ソウル、朴榮喆編輯發行、一九三二年) 卷十一～卷十五所収、『熱河日記』黄國紀略、琉璃廠の条「書冊舖最大者、日文粹堂・五柳居・先月樓・鳴盛堂。天下举人、海内知名之士、多寓是中。」なお『熱河日記』には、今村与志雄氏の抄訳(『熱河日記』一・二、平凡社、東洋文庫三二五・三二八、一九七八年)がある。
- ㉑ 前註⑳。

22 前註⑥、④上卷または⑤第六冊所収。

23 前註⑥、⑦第七冊所収。

24 前註⑥、④上卷または⑤第九冊所収。

25 前註⑥、④上卷または⑤第十・十一冊所収。

26 李德懋『靑莊館全書』(서울대학교古典刊行會、一九六六年)卷六十六・六十七所収。

27 前註②⑥卷六十七。

28 姚觀元編『清代禁燬書目(補遺)』・孫殿起輯『清代禁書知見録』(商務印書館、一九五七年。前者には、『全燬書目』・『抽燬書目』・『禁書総目』・『遺得書目』及び補遺を収める。)

29 前註⑤二七・三〇ページ。

30 前註②『熱河日記』渡江録、七月初三日己卯の条、

余、初則大驚、次不甚喜。問、尊是富公麼。

那老者大喜、道、僑老那從識俺賤姓。

余曰、吾久聞先生大名、如雷灌耳。

富曰、願聞尊姓大名。余書之示。富自書其名、曰富凶三格、号曰松斎、字曰德斎。

余問、甚麼三格。

富曰、是吾姓名也。

余問、貴鄉華貫、在何地方。

富曰、俺滿州鐵藍旗人。

前註②『熱河日記』渡江録、七月初三日己卯の条、

余曰、吾阻水、留此已數日、真此水日難消。僑老、豈有可觀書冊、為借數日否。富曰、無有。往在京裏時、舍親折公、新開刻舖起、

号鳴盛堂。其群書目錄、適在囊中。如欲遣問時、不難奉借。但願

僑老此刻暫廻携、得真々の丸子(清心丸)、高麗扇子、棟得精好的、作面幣、方見僑老真誠結識、借這書目、未晚也。

余、察其容辭志意鄙悖庸陋、無是与語、不耐久住、即辭起。富臨門揖送、且言、貴邦明紳、可得壳買麼。

余不答、而帰。

正使問、有何可觀。恐中暑。

余对、俄逢一老学究。非但滿人、鄙陋無足語。

正使曰、彼既有求、何可吝一丸一筆耶。第不妨借看書目。

遂使時大送与清心丸一丸・魚頭扇一柄。

時大即回、持掌大幾葉小冊而來。皆空紙、所録書目、尽是清人小品七十余種、此不過數頁所録、而要索厚伽。其無恥甚矣。然既為借來、且新眼目、遂臆而還之。

前註⑥、④上卷所収。

32 前註⑥、⑧第十一冊所収。

33 『夢經堂日史』(前註②)編三、十二月初六日甲午の条、

有一蒼頭、來尋余寓。袖納花簡、即昨日文華堂所遇方小東書也。書曰、

昨於書肆中、得親芝字、再領塵談、深為歛慕、茲特檢出、已刻

旧作三本(金台遊学草、枕經堂、駢体文及采芍詞)、奉贈。即

希指教、倘有贈言、必当奉和、亦藉以結翰墨文字緣也。至拙著

金台遊学草、後有為花松岑少宰(沙納)作、東使紀程序一首：

〔附記〕本稿作成にあたり、御指導をいただいた関西大学松浦章助

教授に末尾ながら謝意を表する次第である。